

保育における主体性育成

島根大学教育学部附属幼稚園の保育を考察すると、保育の開始時点から子どもが遊びに動機づけられていること、また、保育者は日々の遊びの事前と事後に「学級で共有する活動」を設け子どもに対して一人一人の遊びを共有させることがポイントとして挙げられる。島根大学教育学部附属幼稚園が展開する「自分でみつけた遊び」は、幼児の自発性がより高い保育であり、保育者は環境構成をより重視する。「自分でみつけた遊び」は、遊びの内容、場所、遊びに必要な物等を幼児が選択し、ひとりもしくは仲間と共に自発的に展開する自発性の高い遊びである。島根大学教育学部附属幼稚園は、「自分でみつけた遊び」を通して、幼児の表現や表出を促し、活動や生活を創造する力を培うことができると考える（島根大学教育学部附属幼稚園，2012）。「自分でみつけた遊び」は一見すると子どもが好き勝手に各各遊んでいるだけのようには観察されることがある。しかし、詳細に観察すると、子どもたちは日々の連続性の中で自らが志向する目的に向かって遊びを展開したり設けた課題をこなすために遊びを展開したりと継続的に遊びを展開していることが分かる。また、各各遊ぶだけでは遊びを幼稚園で展開する意義は低く見積られる。そこで、保育者は共有活動を設けている。この活動は、学会活動と同型的であると考えられる。「自分はこんな遊びをしたよ。」「私たちはこんな工夫をしたんだ。」「僕は誰誰と何何をこうやって作りました。」という交流は、遊びの工夫やアレンジのディスカッションと考えることもできる。島根大学教育学部附属幼稚園では学級担任と学年担任のコミュニケーションが盛んであり、保育者はスムーズな連携で多岐にわたる子どもたちの遊びを支える。

幼小中一貫教育を行う島根大学教育学部附属学校園の今年度の研究主題「学び続ける子どもの育成——問いを持ち、主体的に追求する姿を目指して——」を心理学的に開くと、この研究主題は学習者に学び方を学ぶことを求めていると言える。島根大学教育学部附属幼稚園では保育、島根大学教育学部附属小学校および中学校では各教科を以って、子どもに学び方を教授していると言える。ここで、教育によって求められる学習者の主体性（independence）は主体的か、という問いが浮かび上がる。なぜなら、外的に求められる主体性は従属的（dependent）な主体性となるためである。動機づけも同様で、外発的に動機づけられた（extrinsically motivated）内発的動機づけ（intrinsic motivation）は内発的か、という議論が可能である。島根大学教育学部附属学校園は、この議論を包摂しながら子どもたちに学び方を学ぶことを求めていると言える。

保育における主体性育成に関して、幼稚園で行われる実質的かつ本質的支援を例示する。幼稚園における教育では、幼稚園生活への適応の観点から子どもの安心感への配慮が議論される。幼稚園教育要領（文部科学省，2008）を参照すると、幼稚園教育要領の「第1章総則」の「第1幼稚園教育の基本」の1には、「幼児は安定した情緒の下で自己を十分に発揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して、幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること。」と記述されている。この記述は幾分多義的で曖昧であるが、登園時などは子どもの心的状態への配慮が重要となる場面である。安心感を促進する際には受容性やフィジカルコンタクトであるスキンシップを用いる。受容的な行動やフィジカルコンタクトは、幸福感や安心感を感じさせる下垂体後葉ホルモン（posterior pituitary hormone）であるオキシトシン（oxytocin）および神経伝達物質（neurotransmitter）のインドールアミン（indoleamine）であるセロトニン（serotonin）の分泌を促進するとされている。年少児学級には幼稚園という文脈における集団生活に不慣れな子どもも存在する。登園の後に主たる養育者と離れる際に不安を表出したり泣いたりする子どもには、受容的な行動を行ったり、手を取ったり、側に寄り添ったり、場合によっては抱擁したりすることで、安心感を向上させることが可能になる。この取り組みは実質的であるが本質的であり、主体性育成の一環である。

（共同研究者：人間生活環境教育講座，淡野 将太）

【参考文献等】

文部科学省（2008）. 幼稚園教育要領 教育出版
島根大学教育学部附属幼稚園（2012）. 教育課程 2012 未刊行